

中国見てある記

奥平 志づ江

昨秋、図らずも中国研修の旅をする機会に恵まれた。成田から空路を南西に、日本列島を従断し、東支那海を跨いで中国大陸の表玄関と云われる上海の上空に。そこで進路を北に変え、悠々たる長江（揚子江）の流れ、果しなく続く田園、その間を走る運河と並木路、点在する集落、大蛇に似た黄河のうねりを眼下に通りすぎると間もなく北京空港に着陸、成田からジャンボ機で4時間半の行程である。

華北、華中の主要都市、北京、南京、杭州、上海とその近傍だけを覗いて虹橋空港（上海）から帰国した慌しい旅であったが、「百聞は一見に如かず」の譬えの通り、少なからず、新生中国に対する認識を更め、理解を深めたものとする。以下、大陸で見聞したこと、感じたことを行程の順に拾って述べる。

○ 北京

空港から車で北京市街に向う。広い道路、ポプラや楊柳の美しい並木、スマートな円柱形のボックスを背にして交通整理をする童顔の紅衛兵の姿、行き交う馬車（ロバが曳く）と解放軍のトラック、沿道の至る所で見られるガス、水道、道路、アパートの建築工事や農作業等に人民の活気を感じた。空港より殆んど直線に西南西に走ること50分程で市の西北端にある友誼賓館に着く。ここは中・ソ蜜月時代の1959年にソビエト人技術者の宿泊の為に建てられたもので、広大な敷地に大きな五階建のビル5棟と、映画館、プール、体育館があり、外観は中国風で、内装、設備等はソヴェイェト風の豪華なホテルであったが、部屋の中に松下電機のエアコンと大正製薬のゴキブリホイホイがあったのには奇妙に懐しさを感じた。

北京市は面積16,800平方軒、人口850万の大都市で、道路幅が広く、天安門前を東西に走る中央通りの長安街は幅80～120米あり、歩行者、自転車の多いのに驚いた。

なお所々で今だに残る旧城壁を取壊して道路と市街の拡張工事を進めている事が目についた。

○ 大柵欄地下壕

特別な計らいで大柵欄の繁華街にある地下壕を見ることが出来た。ここは天安門広場

(北京市街のほぼ中央)の南、約1.5 軒のところにある。買物客で雑沓している衣料品店の中の商品棚の脇の押しボタンを担当責任者が押すと、ショーウィンドーと商品棚の間の通路(1.5 米)がぼつかりと口を開いて、地下壕への階段が現われた。階段を下りて地下8 米の通路を進むと厚い鋼鉄製の扉に突き当たる。これも同様、押しボタン操作で開き、階段を下りると地下15 米の壕に入る。天井の高さは2.5 米、幅4 米、周りは煉瓦を積み重ねた上を添喰で塗り固めたもので、床の隅には排水溝が走り、天井には照明灯が一定間隔で、壁には電話線、通気管が取り付けられている。この通路は鋼鉄の扉で幾つかに区切られ、屈折して約4 軒続き、途中45カ所に地下鉄と地上に通ずる入口がある。通路の両側には炊事場、発電設備、教室、倉庫、宿泊等の施設が数多くあり、ここだけで1 万人を収容できるという。このような地下壕は食糧の貯蔵と他国から核攻撃を受けた時に避難するためのもので、全国主要都市には数多くある。何れも商店街の人々が、業余の時間を利用して、自費で材料を集め、煉瓦焼きを始め、全行程を手造りで仕上げたと聞く。大柵欄の地下壕は完成まで12 年を要したと言われている。

○ 万里の長城

万里の長城の重要な関所、八達領までは、北京市街から車で約1 時間の行程である。月から見える地球上の最長の建造物と云われる長城は、延々6,000 軒(1 万2 千華里)に及ぶ雄大な城壁で、従、横25 糎、厚さ10 糎程の灰色の煉瓦を積み重ね、敷きつめて、高さ7 米、幅6 米に築き上げられている。2,500 年前の周朝の末期に、北方諸民族の南下を防ぐために構築され、紀元前200 年秦の始皇帝の時に、軍兵と農民数百万を駆使して現在の堅固な原形が出来上ったと言われる。望楼から壮大な景観を見わたすとき、蟻の如く密集して苛酷な労働を強いられた当時の人民の悲惨な姿が目に見えようであった。

○ 明の十三陵

明の十三陵は北京市の西北約40 軒にある明朝十三代に及ぶ歴代帝王の廟墓である。7 軒にわたる参道の両側には、墓を守る武臣、文臣、馬、ラクダ、象及び神獣などの大きな石像が立ち並び、要所には朱と緑に彩られた牌楼(奥まで進めない参詣者が焼香する所)がその偉容を構えている。最大規模のものは長陵で、成祖の遺体が眠る。25 年前に発掘された地下宮殿は神宗(1573 年から48 年間在位)22 歳の時に着工、兵と人民、10 万人を動員して8 年間で完成したと云われる。天井の高さは8 米程で、大理石で囲われた前・中・後の三殿と5 つの部屋からなり、臣下の棺の安置室も備えた壮大な地下陵である。柱は1 本もなく、重さ4 トンの厚い大理石の扉で5 つの部屋は仕切られ、棺と副葬品の容器は何れも大きな翡翠の塊を彫った華麗なものである。

○ 故宮（旧称、紫金城）

天安門を通り端門を経て故宮の午門（正門）に出る。赤色同形の巨大な門が、広大な敷地、建物の区劃と外周城壁の要所に厳然と構えている。午門を経て太和門を通ると太和殿がある。太和殿は中国最大の木造建築物といわれ、高さ4米の基壇には5道の階段が通じており、中央の階段は輿に乗った皇帝の専用で、その両側を輿を担う16人が通り、更にその外側を皇族と、文武百官が登ったと云われる。中央部分の敷石は、幅2米、長さ10米程の巨大な大理石の一枚岩で、全面に竜と鳳凰が彫られている。太和殿は国家的慶典の折に皇帝が臨席して文武百官の参賀を受けた所で北京市内にこれより高い建物を建てることは許されなかった。太和殿の奥に中和殿、更にその奥に保和殿があり、何れも木造建築物かと疑う程の大きさである。ここは故宮博物院とも呼ばれ、新石器時代から清朝末期までの貴重な芸術品2,000余点の大部分が陳列されているのは保和殿である。城内の敷地面積は70万平方メートル、建築面積は15万平方メートル、部屋数は9,000余で、敷地の基礎はすべて厚さ2米程に煉瓦が敷き詰められ、外壕の池の下を掘って敵が城内に侵入できないようになっている。

○ 景山公園

故宮の北門、神武門を出ると、壕を距てて壮大、華麗な景山公園の景色が広がる。自然を巧みに生かして造園し、池、山、建物を見事に調和させた広大な公園である。

○ 天壇公園

天壇公園は北京市街の南にある広い公園で、遠くから際立って見える美しい新年殿と、壁に向かって話すと声が壁に沿って回る回音壁が印象に残る。又公園の東側路上一面に手製の家具、工芸品等を売っている自由市場は賑わっていた。

○ 南京

南京で最も印象に残るのは長江大橋である。長江（揚子江）は長さ6,300軒、最大河幅18軒の世界第3位の河である。長江大橋は重慶に2つ、武漢に1つ、南京に1つ計4つかかっている。南京の長江大橋は中・ソの関係が冷たくなって、ソヴィエトの技術者が引き揚げた直後の1960年に着工し、純国産の鋼材等と技術で9年後の1968年に完成したものである。橋の上段は道路で長さは46軒、下段の鉄道は68軒、水面から橋の上面までの高さは50米、川幅は1,500米あると言われ、南京側（対岸は浦口）には高さ70米の展望台（エレベーター付き）があるスケールの大きなものであった。

○ 玄武湖公園

南京市街の東北部城壁外にある玄武湖公園内の動物園で見たパンダは、人気者のせいか人間には全然無関心で声をかけても眉一つ動かさなかった。

○ 孫文の墓

市の東郊外にある紫金山の中腹に孫文の墓（中山稜）がある。巨大な屋根門をくぐり杉並木に囲まれた400段の階段（幅30米）を登りつめると孫文の大理石像と墓室がある。稜園の広さは3,000ヘクタール余りと言われる。

○ 汽車の旅

南京から上海経由で杭州まで9時間の汽車の旅は楽しかった。鉄道は広軌で汽関車、客車とも西ドイツ製、車内通路の両側には、テーブルに向き合って4個の椅子が備えられたデラックスなもので、列車服務員（車掌）のお嬢さんから何回もお茶のサービスを受け、快適な旅であった。ところが途中、小さな駅で停車した際、ホームに降りて隣の車輜を見て驚いた。すし詰めに乗っていた乗客が窓から乗り降りしているのは、丁度終戦直後の日本でよく見た光景である。個別の指定席にゆったり坐れたのは外国人専用の軟座車（1等車）であって、硬座車（2等車）とは雲泥の差があったのである。

○ 杭 州

杭州は2,000年の古い歴史をもつ古都で、我が国の飛鳥、藤原、平城、平安時代の文化に影響を及ぼしたと言われる。春秋の末期に、長い間、戦った呉と越の国があったが、蘇州が呉の国、杭州が越の国の主都であった。現在は浙江省の首都であり、中国きっての絹織物の産地であり、風光明媚な保養地として知られている。特に美しいのは西湖の畔りで、湖上に備えた灯ろうの光と併せて9つの月を湖面に映して月見を楽しんだのが「三漂印月」の意味であると知った。

○ 靈隠寺と飛來峰

西湖の西岸にある禅の古刹、靈隠寺は4世紀の始めに印度から来た僧慧理によって創設されたもので、19米もある金色の大仏像がある。この寺の裏山の茶畑の茶が、日本に渡った最初の茶であると聞いた。靈隠寺の向い側にある岩山は印度から飛んで来たと言われ、その名を飛來峰という。ここには70余の洞窟があり、岩に彫られた彫刻、書跡が多い。その中には昔、日本人僧のかな混じりの彫書もあった。中国には印度から、日本には中国から、高僧が渡来して、仏教と文化を伝えたものであろうが、印度、中国の仏教が衰え、日本だけに栄えているのは、近代文明の推移と類似する様に感ずる。

○ 上 海

杭州から、列車で約4時間で上海に着く。車で夜の宝山路を北東に走り続け、約40分程で郊外のホテル「宝山賓館」に着いた。近くに精油所の赤い焰が2、3本見える。ここは日本からのプラント輸出契約で、中止か延期かと最近まで揉めた宝山製鉄コンビナートの直ぐ近くである。コンビナート建設に働く日本人技術者は約300人で、当ホテル

にも若干分宿しているらしい。北側の窓から呉松（ウースン）港が目前に見える。上海は中国一の大会で、人口は1,100万、商工業の中心で、中国の表玄関とも言われ、国際都市として有名であるが、革命発祥の地でもある。行政区劃としては市街区は10の区、各区は幾つかの街道弁事所に、郊外（農村を含めて）は10の県、各県は幾つかの人民公社に管轄されている。歌で知られたガーデン・ブリッジの付近は、古くて大きなビルが立ち並び、国際都市上海の偉容を感じずる町並である。メインストリートを暫らく行くと旧租界に出る。今なお残る古い洋館から、中国人にとって忘れ難い屈辱と革命の歴史の跡が偲ばれる。

○ 豫園

ここは建築と造園設計に巧緻を極めたもので、重なりあう奇岩の間を縫う坂道、池の面に曲折する九直路、水に映る石山と回廊のコントラスト、変化に富んだ風景が、僅か2ヘクタールの敷地を数倍に広く感じさせる錯覚に導くと云う。瓦を重ねて青く彩色した長い竜が横たわる竜塀に沿う小路を進むと、黄色い眼玉の光る頭の付近で「点春堂」に出る。ここは1853年、武装蜂起して清朝と戦った農民の軍団「小刀会」の指令所となった遺跡である。

○ 玉仏寺

玉仏寺はその名のとおり翡翠の仏像があることで有名である。これは冠と腕輪に宝石を散りばめた等身大の釈迦の彫像で、座像と涅槃像、何れも息を凝らして見とれる程の美しいものである。また鯰の頭を押さえた観音像は杭州の靈隠寺で見た彫刻と全く似ている。

○ 上海展覽館

上海展覽館は内外ともに壮大華麗な近代建築で、高い塔の先端に輝く赤い星にクレムリンを回想した。館内に展示された工芸美術品の種類と数の多いのに驚いた。

○ 国際飯店

国際飯店はホテルと売店とレストランが、フロアーを分けて同一ビル内に同居している感じである。レストランの客はホテルの宿泊者以外の団体客が多いように見えた。飲物にその土地のビール、茅台（マオタイ）酒、ワインが用意されたのは何処の飯店でも同じ。またコックさんに芸術家が多いと云うことも聞いていたが、食卓に飾られた野菜の彫刻と賞美のために並べられた「おしんこ細工」は見事であった。野菜の彫刻は人参と胡瓜を主材にした鳳凰で美しかった。又「おしんこ細工」は果物や動物をモチーフにした小さい物が多かったが、中国では昔から「べっこう飴」等、この種の芸術食品があったといわれる。

○ 魯迅の墓

宝山賓館から市街に向かって少し行った所に、中国の革命作家で日本にも馴染みの深い魯迅（1881～1936年、本名 周櫛人）の故居がある。三階建のアパートの質素な住居と日本留学時代からの遺品には興味深いものがあった。ここから歩いて数分の所に虹口（ホンキョウ）公園がある。その奥に造られた墓地には毛沢東の筆になる「魯迅先生の墓」と刻まれた高い墓碑が立っている。ここの公園で幼稚園児の散歩するグループに会ったが、子供たちはカラフルできれいに洗たくされたズボンと上衣を着ていた。近くでは、ボール遊びに興じていた老人たちの姿も見えた。

上海での日程を最後に上海国際空港から、再びジャンボ機で3時間半後に成田空港に無事帰着した。以上は見たこと感じたことの大部分であるが、振返って特に印象深かったこと、知り得たことを追記する。

1. 工芸美術品の氾濫

寺院建築に見る彫刻、仏像等の古くて大きな作品は勿論、観光地や商店等に陳列された大小の工芸品、書画類の多いのに圧倒された。また、宗教、芸術その他の文化すべての面で歴史の古さと、奥行きの高さを感じると同時に、日本文化の大部分のルーツを中国で見たような気がする。

2. 盛んな建築工事

住宅、道路その他都市造りの建築工事の力強い響きが到る所で聞える。

3. 交通事情

大都市の繁華な通りでは歩行者と、自転車歩道、車道に溢れ、通行区分や信号よりも警笛と人々の注意力によって事故を防いでおり、自動車（公用車で自家用車はない）優先という感じはなかった。夜間、町中では自転車も自動車も無灯火で走っているが、事故防止のためであると聞いた。

4. 人々の印象

行き交う人々は皆友好的で特に日本人に対する関心の深いこと、国の大きさと歴史の古さのせい、考え方の広いことを知った。書籍とメモを携行して勉強している若い人、朝早くから太極拳に励んだり、街中をジョギングしている人の多いのが目についた。反面、政治体制の故か、近代化の重要性については意見が統一されていた。

5. 賃金と経済活動

労働者の賃金は1級（最低）より8級まで、公務員は25級（最低）より1級まで段階があり、何れも最低は約40元（1元は日本円で現在130円位）級間の格差は平均5元で超過勤務分は賞与として給される。所得税を納める人は限られた高級公務員だけで、数え

るほどしかないと言ふ。物価は全国的に統一され、特に食品類は、食肉（牛、豚）は1斤（600g）1元前後、野菜類は1斤0.1元程度と安い。1人、1カ月の食事代は、12元～17円で充分であると言われている。

余暇を利用して生産した手作り工芸品、衣類、家具類を自由価格で販売出来る。食料品は豊富に出回っている。カメラ、ミシン、電気製品等は割高で、自転車は150元～200元程度と云われる。したがって身分不相応な持ち物は当然チェックされるわけで、このことが高価な贈り物や、不正取引等を防止するのにも役立っているようである。

6. 宗 教

宗教について質問したら「信教の自由はあるが、信じない自由もある」と明快な答が帰ってきた。共産主義は唯物主義であるから、特定の宗教に偏向する者は党员としての資格に欠けるとの意味らしい。数多くある寺院でも、焼香したり喜捨するのは日本人観光客ばかりで、中国人には殆んど見かけられなかった。日本でも無宗教の人は多いが、この点では正に対象的である。

7. 教 育

普及教育（日本の小、中、高校）には学費（年間4～6元）がかかり、大学教育は統一選抜入学制であるが学費は無償で、学生の家庭の状況に応じて月10元前後の手当が支給される。教育の機会均等が図られている点を評価したい。

8. 福 祉

年金給付率が停年退職時の給与の75%であること、医療費が無料で最低生活が保障されていること等、福祉面では秀れていると感じた。

以上